

取組紹介④ D高等学校

4 技能統合型授業の実践とともに 生徒のスピーキング力の向上を目指す

◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 27 年 2 月調査日時点）

設立・形態	昭和 48（1973）年設立 全日制／2 学科（本報告書では「I 学科」「II 学科」と呼ぶ）／共学
学級数・生徒数	I 学科／第 1 学年…6 学級（240 人） 第 2 学年…6 学級（238 人） 第 3 学年…6 学級（242 人） II 学科／第 1 学年…1 学級（39 人） 第 2 学年…1 学級（40 人） 第 3 学年…1 学級（40 人）
A L T 活用状況	ALT は 2 人。1 人は常勤、もう 1 人は週 3 日勤務。I 学科・II 学科を問わず 1・2 年次で各クラス週 1 回
取組の特長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4 技能統合型の授業… 4 技能を活用した生徒のパフォーマンス中心の授業 ・ 定期考査の工夫… 学校独自でリスニング・リーディングテストを開発 ・ 海外研修・留学… 1 年次 3 月に希望者を対象としたオーストラリア研修を実施

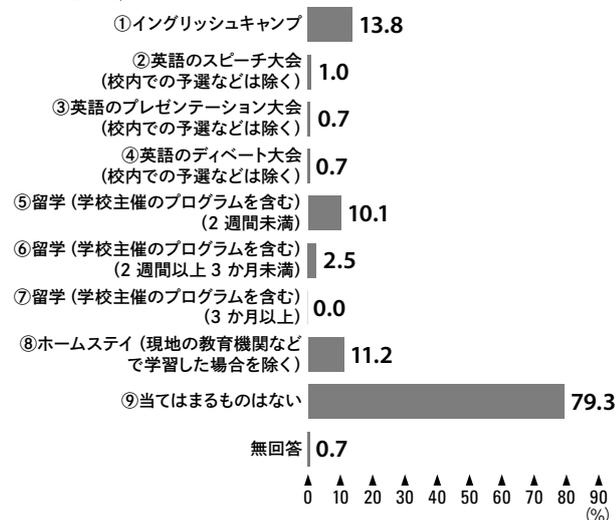
◎試験結果、質問紙における学校の特徴

・ 第 3 学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
D 高等学校	152.3	152.4	67.7	10.3
全国平均（公立学校）	126.7 / 320	117.1 / 320	24.9 / 144	4.2 / 14

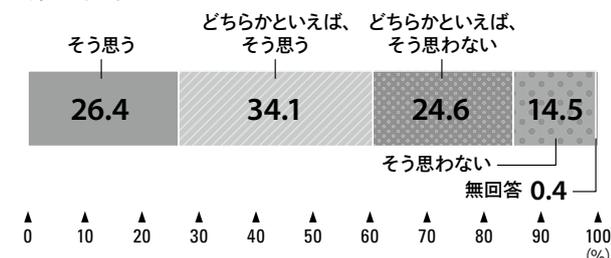
・ 生徒質問紙結果

No. 3 高校生になってから経験したことがあることは何ですか。当てはまるものをすべて選んでください（複数回答可）。



No. 14 以下の学年の英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

・ 第 3 学年



3 年次でも言語活動中心の授業、留学やホームステイの経験者が多い

スコアは 4 技能すべてにおいて全国平均よりも高い。また、生徒質問紙 No. 10～13「英語を聞いて概要や要点をとらえる活動」、「英語を読んで概要や要点をとらえる活動」、「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりする活動」、「聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする活動」は、いずれも高い割合で実施している。第 3 学年になると、No. 14「英語でのスピーチやプレゼンテーション」、No. 15「英語でのディベートやディスカッション」を実施する割合が下がる学校が見られるが、同校ではその割合を維持、あるいは更に高めている。また、生徒質問紙 No. 3「高校生になってから経験したことがあること」において、留学・ホームステイを経験した生徒総数は、今回の調査で同程度のスコアの学校では 1 桁という学校が多く見受けられるが、同校では 66 人と非常に多く、そのうち 32 人は第 1 学年で経験しているのも特筆すべき点である。

◎調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. 新学習指導要領の実施、研究指定を契機に、4技能を統合した指導の確立を目指す

D高等学校は、二つの学科を擁する全日制の公立高校である。市の中心部から電車で20分ほどのベッドタウンに位置し、落ち着いた校風と堅実な進学実績により、地域の信頼も厚い。国公立大進学者は現役・浪人合わせて例年80人程度となっている。

平成25年度、国立教育政策研究所の「教育課程研究指定校事業」の指定を受け、「コミュニケーション英語Ⅰ」における4技能統合型授業の研究に取り組んだ。スピーキング力の育成が研究の中心であり、生徒の言語活動主体の授業、教員間での指導内容やハンドアウトの共有、リスニングやスピーキングを評価する独自テストの開発などを進めてきた。

今でこそ生徒の言語活動が中心となった授業を行い、授業中に多くの英語が飛び交うようになったが、研究指定前は試行錯誤の連続であった。平成24年度に1学年を担当した4人の英語科担当者が話し合い、新学習指導要領を見据えて言語活動主体の授業を進めることになった。しかし、前年度に3学年を担当した教員が多かったこともあり、ペア・ワークなどを積極的に取り入れる教員がいる一方で、入試を意識し過ぎた指導に傾いてしまい、講義中心型で進める教員もいるなど、必ずしも統一された指導にはなっていなかった。

転機は、学年が上がる2年次だった。平成25年度、前述の通り、1年次で「コミュニケーション英語Ⅰ」の研究が始まったことから、2年次においても学年全体で言語活動中心の授業に転換する動きが出てきた。グローバル人材の育成という社会的なニーズがある中、講義中心の授業を続けていたのではそのニーズに応えることはできないという考えから、英語科全員が指導の方向をそろえ、4技能を統合した授業を確立して指導方法や教材の共有化を図る方向で見直しが進んだ。

これまで自分の指導に自信を持っていた教員が、学年担当者同士で授業を見合い、「日本語を使い過ぎている」という指摘を受けたことをきっかけに新しい指導を柔軟に取り入れていくなどして、全体での改革が推し進められていった。学年の教員間でretellingやreproductionなどができるようになることを目標に据えて指導方針を共有するとともに、ディベートを頻繁に取り入れるなど、更に英語を使う機会を増やした。ワークシートなどの教材も学年内で共有し、3か月ごとに担当者を決めて教材作成を進めた。

授業では生徒の英語力に合わせた丁寧な説明と、学習したことを確認する問題を含むプリントを準備することで、日本語による説明を最小限に抑え、極力英語を中心とした授業を行っている。授業改革をした当初は、英語で授業を進めることに対して、生徒から「わからない」と言われることもあった。そのような指摘を受け、教師はなるべく平易な英語を用いるように心がけている。

2. ペア・ワークでは様々な言語活動を行い、英語表現の適切さを相互評価する

授業の具体的な展開方法については教員個々の経験やアイデアを生かしながらも、指導方針や教材はしっかり共有するというのが同校のスタンスである。授業ではペア・ワークに充てる時間を大幅に増やすとともに、生徒が自由に考えてアウトプットできるように工夫を凝らしている。

ペア・ワークでは、教科書の本文に関する英問英答に加え、一方の生徒が単語の意味を英語で説明し、もう一方の生徒がその単語を答えるといったゲーム形式も取り入れている。さらに、「コミュニケーション英語Ⅰ」の研究に取り組んだ平成25年度の1年次では、毎回授業の最後の10～15分を使って、テーマを決めて話す活動を取り入れた。例えば、「消費税の3%増税についてどう思うか」など高校生にも関心の高い話題を取り上げ、各自の考えとその理由を伝え合った。また、毎回の授業で、教科書本文の内容を50～60語程度で要約したり、感想を英語で2～3行程度書いたりした。

上記の活動を行う際、ただ話すだけではなく、生徒同士で使っている語や表現が適切であるかどうか

を相互評価している。相互評価では、文法的な正しさよりも相手に意味が通じるかどうかを重視し、自由に英語を使える雰囲気をつくるようにしている。これは、スピーキングに厳密さを求めすぎると生徒が委縮してしまうと考えているからである。

3. リスニング、スピーキングはパフォーマンステストを実施し、リーディングは初見の英文で評価する

スピーキングの評価は、教員と生徒の1対1のインタビュー形式で行う。イラストや写真などを見て内容を説明する問題が中心で、教員4人で分担し、同時進行で行う。評価は、発話・内容・態度の各観点を、3-2-1の3段階で行う(図1)。「英語を話そうとする意欲」のみ5-3-1としているのは、特にスピーキングでは、文法などの正確さよりも話そうとする意欲が大切だと考えたためである。

リスニングのテストは、平成25年度の1年次では、すべての定期考査において10分程度の時間を使って実施した。テストの実施に当たっては、オリジナルの英文原稿を作成し、ALTらと分担して録音した。

定期考査のリーディングでは、出題する英文はすべて教員が独自に作成し(図2)、教科書の英文をそのまま使うことはない。例えば、地元のプロ野球チームの優勝などの身近な話題をテーマにした英文、教科書で読んだ英文の話題に関連した、より発展的な英文などを作成し、その中に学習した語・表現や文法事項を組み込んでいる。同校では、言語知識を身に付けるためには同じ英文を読むことにも意味はあるが、日常生活で同じ文章を二度以上読む機会はそれほど多くないため、獲得した知識を活用する力を測るためには初見の英文を用いる必要があると考えている。

図1 スピーキングテストの評価表

Speaking Test Evaluation Sheet スピーキングテスト評価表			
No.	Name		
Date	Month	Day	Year
1 Speech 英語の発話	① Loudness, clarity 声量, 聞き取りやすさ	3-2-1	
	② Fluency of English Sounds 英語の音の流暢さ	3-2-1	
2 Content 英語の内容	① Quantity 分量の適切さ	3-2-1	
	② Clear Logic, Consistency 論理性, 一貫性	3-2-1	
3 Attitude 英語以外の態度	① Eye Contact, Gestures, etc. アイコンタクト, ジェスチャー等	3-2-1	
	② Willingness to Speak English 英語を話そうとする意欲	5-3-1	
4 Overall Evaluation 総合評価			Total Points Grade
Explanation of Grades			
A: Superior 15%: 36名	B: Above Average 15%: 36名	C: Average 40%: 96名	D: Below Average 30%: 72名

図2 定期考査における独自テキスト

追加資料① 定期考査(一部の問題例)

第5問 以下の英文は、仙台に住むアメリカ人の中学生が書いたエッセイです。これを読んで、1~4の設問に答えなさい。

Last Sunday, there was a parade for the Tohoku Rakuten Golden Eagles in Sendai City. About 214,000 people came to see the buses carrying the great players who had brought Japan's championship to the city. It also had something to do with the *recovery of the places in Tohoku damaged by *the Great East Japan Earthquake.

That is the reason why this baseball championship is more important with the slogan, "Don't give up, Tohoku."

Two things that happened this year are similar to what I wrote about for Sendai. First, in April, though it may not be so serious as what happened in Tohoku, *the Boston Marathon bombings occurred in which three people were killed and 264 *were injured. Second, in October, our local professional baseball team, the Boston Red Sox, became the national champions in the United States. This made a lot of people excited.

On November 15th, a lady named *Caroline Kennedy came to Japan as *the United States Ambassador to Japan. She belongs to the Kennedy family who have mainly lived in Boston. She is the daughter of *John F. Kennedy, the respected *U.S. President who was killed in a parade on November 22nd, 1963. () years after he died, there was a ceremony on November 22nd, 2013.

I came to Japan three years ago.

It means that I will build bridges between Japan and America, like she has done. And I wish for the true recovery of people *in need in both countries.

教室からの声

平成25年度「コミュニケーション英語Ⅰ」を履修した生徒へのアンケート調査では、「ペアで会話するのはとても楽しかった」、「英語をしっかりと聞き取ろうとする意識が高くなった」、「教科書の英文を要約することが力になった」、「即興で英文を書く力がついたらと実感できた」という感想が多かった。一方、「もっとゆっくり英語を話してほしい」、「日本語で補足して、より理解を深めることも大切」など、少数ではあるが、すべて英語で進める授業に違和感を持つ生徒がいる様子もうかがわれた。

◎授業以外の取組

1. 1年次の春休みに、希望者を対象に海外研修を実施

Ⅱ学科では毎年、校外の会場で発表会を実施し、日頃の学習成果を学校内外に発信している。発表内容は、スピーチコンテスト、レシテーション、プレゼンテーション、ディベートなどである。スピーチコンテストは県主催のコンテストの校内予選を兼ねており、Ⅰ学科、Ⅱ学科の生徒が出場する。審査はALTを含む4人の教員が行い、10人ほどの出場者から代表者を選抜する。

海外研修は、学科を問わず、希望者を対象として1年次の春休みに実施している。オーストラリアで10日間ホームステイをし、現地の高校にも通う。ここ数年の希望者は50～60人で、増加傾向にある。海外研修に参加した生徒の多くは、自分の英語でコミュニケーションを図ることができたという喜びを感じ、モチベーションを高めて帰ってくるという効果がある。海外研修を機に、本格的な海外留学を志す生徒も少なくない。夏休みを利用した短期留学に加え、各学年に数人は1年間留学する生徒がいる。ただし、海外の大学へ進学する生徒はまだいない。

2. 休み時間や掃除の時間でも英語教員は生徒に英語で話しかける

授業中だけでなく、休み時間や掃除の時間などにおいても、英語教員と生徒との間で活発に英語が飛び交うのも同校の特長である。教員が休み時間や掃除の時間などに生徒に話しかけるときは、あえて英語を使うように意識していることが生徒の意識向上にもつながり、授業に向かう意欲にも影響している。また、2人のALTが昼食や掃除の時間に生徒と英語で語り合う光景も日常的なものとなっている。普段から英語が使われている学校文化が少しずつ広まりつつあることが、生徒の海外志向に良い影響を及ぼしていると考えられる。

国立教育政策研究所の研究指定が終了してから1年が過ぎようとしているが、生徒が英語を話そうとする意識や態度、外国の人たちと英語で話せるようになりたいという意欲の高まりは低下していない。今後は、生徒の発話の質を上げるために、発音やイントネーションなどの「音声」と、論理性などの「内容」の両面から、授業の更なる改善を図っていったり、必ずしも言葉に表すことを求めない日本と、きちんと言葉に出して相手に伝える英語圏の言語文化の違いなども生徒に理解させていったりすることで、生徒の英語力を更に伸ばしていく考えである。

取組紹介⑤ E高等学校

独自の教材とワークシート、活発な姉妹校交流により総合的なコミュニケーション能力の向上を図る

◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成27年2月調査日時点）

設立・形態	昭和62（1987）年設立 全日制／2学科（本報告書では「I学科」「II学科」と呼ぶ）／共学
学級数・生徒数	I学科／第1学年…4学級（128人） 第2学年…4学級（135人） 第3学年…4学級（141人） II学科／第1学年…2学級（60人） 第2学年…2学級（56人） 第3学年…2学級（64人）
ALT活用状況	常勤のALTは2人。1・2年次はそれぞれI学科が週1回、II学科が週2回。3年次はI学科が隔週、II学科が週3回
取組の特長	<ul style="list-style-type: none"> ・独自教材の使用…学校独自の教材で1年次からアウトプットを実施 ・4技能統合型の授業…指導内容やワークシートをそろえ、言語活動重視の授業を展開 ・姉妹校交流…2年次を中心に、アメリカ・オセアニアの姉妹校との相互交流事業

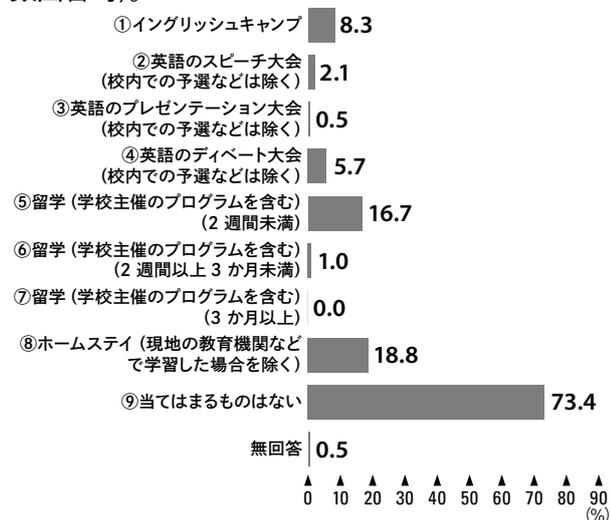
◎試験結果、質問紙における学校の特徴

・第3学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
E高等学校	156.1	155.5	70.2	11.3
全国平均（公立学校）	126.7 / 320	117.1 / 320	24.9 / 144	4.2 / 14

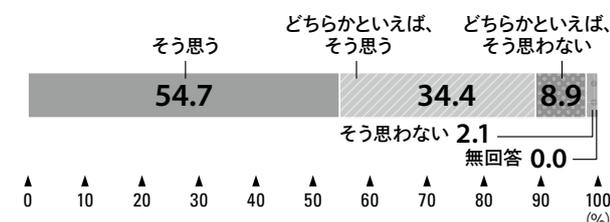
・生徒質問紙結果

No.3 高校生になってから経験したことがあることは何ですか。当てはまるものをすべて選んでください（複数回答可）。



No.15 以下の学年の英語の授業では、英語でディベートやディスカッションをしていたと思いますか。

・第3学年



4技能を総合的に使う言語活動が群を抜いて多い

4技能のスコアは、全国平均を大きく上回っている。授業での言語活動は4技能のいずれも高い割合で実施している。生徒質問紙No. 10～13「英語を聞いて概要や要点をとらえる活動」、「英語を読んで概要や要点をとらえる活動」、「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりする活動」、「聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりする活動」をしていたかについて、「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」の合計回答率がいずれも3学年を通じて80%以上である。さらに、No. 15「ディベートやディスカッション」については、合計回答率は学年が上がるにつれて高まり、第3学年では約90%である（全国平均16.5%）。また、生徒質問紙No. 3「高校生になってから経験したことがあること」について、「⑤⑥留学（2週間未満／2週間以上3か月未満）」、「⑧ホームステイ」と回答した生徒は延べ70人で、海外生活経験のある生徒も多い。

◎調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. コミュニケーション能力の基礎は学校独自の教材で育成

E高等学校では、例年80～100人の生徒が国立大学に進学する。創立以来、グローバル教育にも力を入れ、そのノウハウを蓄積してきている。同校の英語教育の大きな特徴は、学校独自の教材を使って、1年次からコミュニケーション能力の育成を重視した指導を行っている点である。独自教材による授業は、I学科の1年次、II学科の1～3年次で実施しており、I学科が週1時間、II学科が週2時間である。I学科ではクラスを半分に分けてALTと日本人教員が1人ずつ、II学科では全学年とも1クラスにALT1人と日本人教員2人が入って指導している。

1年次は、I学科・II学科とも『LET ME INTRODUCE MYSELF』という教材を使用する。同教材には五つのユニットがあり、それぞれ自分、家族、学校、我が町、我が国を紹介する構成になっている。ディスカッションや自由英作文なども含め、実践的なコミュニケーションを学習する内容になっている。1年次の独自教材を使用した授業は、I学科は「英語表現I」（旧課程では「オーラルコミュニケーションI」）、II学科は「英語表現」で実施している。

教材は、見開き2ページで1単元になっている（図1）。冒頭にモデルとなる“Dialogue”があり、その後にペア・ワークで使う“Questions”、扱う話題に関連した“Words and Phrases”や“Useful Expressions”が続いている。これらを活用しながらペア・ワークなどで何度もアウトプット活動を行った後、最後にある“Questions from the World”で単元に関連した自由英作文に取り組むようになっている。ここでは、例えば、“Why do Japanese people want to know each other’s blood type?”など、生徒自身の考えを問う設問が用意され、1年次から決まった答えのない問いに繰り返し取り組むことで思考力や表現力を養うようにしている。英語教育をより重視するII学科では、I学科と同じ独自教材を用いるが、単元の最後に行う表現活動ではI学科の2倍の時間を割くなど、活動の深さが異なる。

図1 1年次の独自テキスト『LET ME INTRODUCE MYSELF』

Language Skill: Speaking in a loud voice



Dialogue

A: Hey! What's your name?
B: Hi, my name is Akira.
A: Nice to meet you Akira, my name is Megumi. What junior high school are you from?
B: I'm from Manyo Junior High School.
A: Really? My cousin is, too! Where do you live?
B: I live in Kita Machi, Echizen City. What about you?
A: I live in Funatsu, Sabae City. We should hang out sometime. Give me your email address and phone number so I can call you.

Questions

- What is your name?
- What junior high school are you from?
- Where do you live?
- When is your birthday?
- What are your hobbies? / What do you do in your free time?

ride (my) bike



read books



play the violin



go swimming



play basketball



email address	phone number	favorite	hang out
international / academic	course		
Play	Sports: baseball badminton basketball table tennis		
	Instruments: the piano the flute the violin		
Watch	movies documentaries music videos the news		
	DVDs dramas variety shows		
Read	novels magazines comic books newspapers		
Collect	coins postage stamps photo stickers		

Useful Expressions

- My name is ... / I am...
- I'm from () Junior High School.
- I live in ...
- My birthday is (month) (day) in (year). / I was born on ...
- My hobby is watching
collecting
reading () / I usually ~ in my free time.



Questions from the World

- What sports are popular in Japan?
- Why do Japanese people want to know each other's blood type?

Notes

Self Evaluation 1
Speak in a loud voice (very good / good / not enough)

2. II学科では「異文化理解」「時事英語」で、ディベートやディスカッションなどを行う

2年次は「異文化理解」、3年次は「時事英語」の中でII学科のみが独自教材を活用する。1年次はペア・ワークが中心だが、2年次以降は、時事問題や社会的な話題についてグループで意見をまとめ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションを中心にを行い、4技能を総合的に育成している。

[活動例] 単元の話題：国際紛争

- ① 生徒が各自で書籍やインターネットを使って事前にリサーチを行い、国際紛争問題に対する解決策を複数考える。
- ② 上記①で考えた解決策をグループ内でシェアした後、一つの結論に集約する。
- ③ グループごとに全体発表を行う。
- ④ 各グループの発表の中から最善の解決策を選んでクラス全体の結論とする。

※上記①～④の一連の活動は、すべて英語で行われている。

3. 教員同士が意見を出し合ってワークシートを作成・共有し、授業の流れをそろえる

ワークシートは、学年ごとに作成している。まず、単元ごとに担当者を決めてたたき台を作成し、その後、学年の担当者全員によるミーティングでアイデアを出し合いながら改善していく。このようにして作成したワークシートは教員間で共有し、指導の内容や方法をそろえている。

例えば、2年次の「英語Ⅱ」のフランスの自転車選手をテーマとした単元を扱う授業では、155ページ図2のワークシートを用いて、主に次のように進めた。

- ① “Goals of this lesson”として示した4技能別の単元目標を確認する。
- ② 初見で本文を読む（First Reading）。
- ③ “Outline Check”として、True-False questionsで本文の概要理解を確認する。
- ④ “Make a Comment”として、“Why was Lance able to get over the obstacles and win the Tour? State your idea with two reasons.”という質問に対し、自分自身の考えをその理由とともに書く。
- ⑤ 本文を再度読む（Last Reading）。

※上記②のFirst Readingと⑤のLast Readingで読みの速さをパートごとに計り、上達度を測定する。⑤では②よりも20%以上速く読めることを目標としている。

授業では、生徒同士で行う活動をできるだけ織り交ぜるようにしている。例えば、上記③の“Outline Check”でTrue-False questionsの答えを確認し合う、④の“Make a Comment”で書いた文章を互いに読み合うなどの活動はペア・ワークを主体に英語で行い、4技能を統合してレベルアップを図る工夫をしている。

4. 「Can-Do Check List」で、生徒・教員とも学期ごとの達成度を評価

スピーキングの評価は、生徒と教員が1対1で、音読とインタビューテストで行っている。音読には教科書本文を用いる。インタビューテストは、ワークシート中の意見を問うものから出題し、4～5文程度で答える形式で行う。

ライティングの評価は、単元の最後に行う表現活動と同様の自由記述形式のエッセイを課することが多い。1年次は身近な活動について100語程度、2年次は社会性のある話題について150語程度、3年次は同200語程度を目安としている。

いずれの評価においても、教員間で評価方法を統一した上で、複数の教員が採点する。評価を行う際、必ずしも厳密な正確さは求めない。これは、例えば、ライティングにおいて誤りをその都度減点していくような方法では、書けば書くほど評価が低くなり、生徒のモチベーションも下がってしまうという考

図2 2年次「英語Ⅱ」のワークシート

Lesson 1 Go Armstrong! <1st period>
Goals of this lesson

<Reading>
① Step 1 各段落のTSが指摘できる Step 2 文章全体の流れがわかる Step 3 詳細理解ができる
② Step 1 文中の強勢をつけることができる Step 2 Listen and repeat, read & look upができる
③ 初見時より20%UPして読める

<Speaking & Writing>
④ Step 1 Q-Aや自分の意見を言うことができる Step 2 教科書の各パートの要約ができる Step 3 要約と意見を書くことができる

<Listening>
⑤ 英文を聞いて何について話されているのか理解できる

Pre-Reading Activity
1) Riding bicycles is becoming popular in Japan. Why?
2) Look at the pictures on p.6. Describe what you see.

Vocabulary Check
1) Learn the meaning of the following new words. They will be useful when reading the lesson.

1. obstacle (n)	2. opportunity (n)
3. survival (n)	4. miraculously (adv)
5. make up one's mind	6. spectator (n)

* (n) 名詞, (adv) 副詞

First Reading
Read the whole lesson and write down the time, then answer the following T/F questions.

Part	1	2	3	4	Total
Time	秒	秒	秒	秒	秒

Outline Check

1. () Lance liked playing football better than riding a bicycle.
2. () Lance was attracted to his second bike. Part1
3. () Lance made his international debut as a cyclist in Japan.
4. () The worst obstacle in his life was having cancer. Part2
5. () Lance's coach advised him not to ride his bike again.
6. () Some letters on the road were written for Lance. Part3
7. () Lance never won the Tour de France after recovering from cancer.
8. () Lance says we can change obstacles into opportunities. Part4

Make a Comment
Why was Lance able to get over the obstacles and win the Tour? State your idea with two reasons.

ここからはLesson 1のまとめの授業を行います。

Last Reading

Part	1	2	3	4	Total
Time	秒	秒	秒	秒	秒

*Did you read 20% faster than the first time?

Self-Evaluation (自己評価)
上記の Goals of this lesson を達成 (できた ほぼできた あまりできなかった)
次のレッスンでがんばりたいこと
You can write either in English or Japanese.

図3 Ⅱ学科「Can-Do Grade」

Can-Do Grade

年間行事	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
定期試験		○		○			○		○			○		○			○		○		○		○		○		○		○		○		○		○		
英検 GTEC			○				○		G	○																											
各種コンテスト						Exam	Exam											Exam	Exam																		
スピーチテスト			○						○																												
公開授業				○		○		○		○																											
Can-Do Check				○		○		○		○																											
課外研修・交流	○			○	○																																
Reading	1年												2年												3年												
内容理解	Step 1: 各段落の Topic Sentence を意識しながら大まかに理解できる Step 2: 文章全体の流れを意識しながら大まかに理解できる Step 3: Topic Sentence や流れを意識しながら詳細に理解できる																																				
音読活動	Phrase reading を基に Step 1: 文中の強勢をつけることができる Step 2: Listen & Repeat や Read & Look up などができる Step 3: Shadowing ができる																																				
音読スピード	初見時より学習後のほうが教科書を 20% 程度速く上げて音読できる																																				
多読活動	週刊 ST, CBBC (1500 語レベル) を 15 記事程度読んで概要が把握できる												Asahi Weekly, VOA (2000 語レベル) を 15 記事程度読んで概要が把握できる												BBC, ABC News (3000 語以上レベル) を 10 記事程度読んで概要が把握できる												
辞書使用	英和辞書で意味・発音・品詞・用例が調べられる 簡単な英英辞書も使うことができる																																				
Speaking	1年												2年												3年												
発信内容	自分のまわりのことについて話すことができる												日本と世界の関わりのあることについて話すことができる												時事問題や地球規模のことについて話すことができる												
発信スタイル	3分程度のスピーチやスキットができる												リサーチを基に4分程度のスピーチができる												課題研究に基づき5分程度のプレゼンができる												
Discussion	グループ内の討議をまとめ、報告できる グループからの報告についてその場で Q&A ができる																																				
デリバリー	適切な音量で話せる ・聞き手の目を見て話すことができる ・自分の意見が伝わるように感情をこめて話すことができる ・リズム・イントネーション・発音に注意して話すことができる																																				
Debate	身近なことについて、2対2で立論・反駁できる 社会性のあることについて、2対2で debate ができる 時事問題について、チームで debate ができる																																				
Listening	1年												2年												3年												
態度	指導者等の指示や説明を理解し、速やかに対応できる Q&A につながるように聞きながら critical thinking ができる 速やかな議論につながるように聞きながら CT や予断ができる																																				
内容理解	簡単な洋画や Short story など大まかに理解できる National Geographic など大まかに理解できる CNN Student News など大まかに理解できる																																				
コミ活動	pair work, speech, presentation, discussion, debate などの活動において、クラスメートの発信内容を理解できる																																				
Writing	1年												2年												3年												
エッセイ内容	自分の身近なことについて150語程度で書ける												社会性のあることについて250語程度で書ける												社会性の高いことや時事的なことについて500語程度で書ける												
エッセイ形式	intro-body-conclusion の形式で書くことができる AREA のルールに従って書くことができる AREPA のルールに従って書くことができる																																				
要約・意見文	教科書各パートを読んで要約や意見を書くことができる 新聞記事を読んで、要約や自分の意見を書くことができる																																				
コミ活動	speech, presentation, discussion, debate などの活動において、発信メモや聞き取りメモをとることができる。																																				
再生活動	Step 1: 学んだことを語や句レベルで活用できる Step 2: 学んだ内容などを活用できる																																				
Critical Thinking	1年												2年												3年												
RSLW	・事実・意見/主張・具体例を区別して考えることができる ・AREA/AREPA/現状・課題・解決策を考えることができる ・複数の視点(SHEETMEG)から考えることができる																																				
Reasoning	ある事柄の理由(メリット・デメリットなど)を明確に5つ考えることができる ・ある事柄の理由を考えるのに WHY を3回続けることができる																																				

社会的のあることや時事的なことについて、その場で英語でのやり取りができる

えからである。

各技能の学習到達目標は、「Can-Do Grade」(155ページ図3)によって定めている。この中で、4技能及びクリティカル・シンキングについて、学年ごとに目標を設定している。さらに、定期考査、各種検定やコンテスト、研修・交流などのスケジュールも併せて掲載し、生徒が見通しを持って学べるように配慮している。

「Can-Do Grade」の達成度は、学期ごとに「Can-Do Check List」(図4)を用いて評価する。各技能を複数の項目に分け、生徒がそれぞれ4段階で自己評価を行う。教員はそれを集計し、50%未満の項目については次学期以降に重点的に補強していく。この「Can-Do Check List」は、生徒にとっては自己到達度を測るツール、教師にとっては指導改善の羅針盤の役割を果たしている。

今後は、4技能とともにクリティカル・シンキングの更なる育成に力をそそいでいくこととしている。同校では、入学当初は学びに対して受け身の生徒が多い。授業における多様な言語活動を通して、生徒は様々な意見や解決策を共有しているが、自分一人で複数の視点から分析的に思考できる生徒をもっと増やしていく必要があると考えている。自分で主体的に考え、よりよいアイデアを構築していく姿勢はグローバル化が進む中でますます求められていくため、個々の生徒が主体的に考え、論理的に分析する力を伸ばしていくことが今後の課題である。

図4 II学科3年次「Can-Do Check List」

Can-Do (できる度チェック)Check List		3年生 II学科	
今学期に、各項目に関して、自分がどのくらい出来るようになったかを自己評価してみましょう。			
右の表を参考に段階1~4を記入し、マークシートに転記しましょう。マークシートには学年、クラス、番号、氏名も記入して下さい。			
※の技能については、内容を習った後とし、その他は初めて見た時とします。			
		段階	
		簡単に出来る	4
		だいたい出来る	3
		あまり出来ない	2
		ほとんど出来ない	1
技能	CAN-DO 項目	マークシート番号	段階
リーディング	内容理解	STEP 1 教科書レベルの英文を大まかに理解でき、各段落の要点(トピックセンテンス)がどれか分かる	1 ()
		STEP 2 教科書レベルの英文を大まかに理解でき、各段落の要点のつながりが分かる	2 ()
		STEP 3 教科書レベルの英文をほぼ正しく理解でき、文章全体の最も面白いことが分かる	3 ()
	※音読活動	STEP 1 教科書レベルの英文をフレーズに区切り、強勢をつけて音読することができる	4 ()
		STEP 2 教科書レベルの英文を、Listen & RepeatやRead & Look upで音読することができる	5 ()
		STEP 3 教科書レベルの英文をShadowingできる	6 ()
	※音読スピード	はじめて音読した時の速度より、学習した後に音読した方が、20%程度早く読むことができる	7 ()
	多読活動	BBC、ABC Newsを学期に5記事程度読み、概要を把握することができる	8 ()
	辞書使用	簡単な英英辞書を使って意味を確認することができる	9 ()
スピーキング	発信内容	時事的な事柄や、世界規模の事柄について話すことができる	10 ()
	発信スタイル	課題研究を行い、それに基づいた5分程度のプレゼンテーションができる	11 ()
	Discussion	グループディスカッション後のまとめの発表についての質問や答えを考えた上で話すことができる	12 ()
	Debate	社会性のある事柄または時事的な事柄について、チームでDebateすることができる	13 ()
リスニング	態度	話されている内容を理解し、次の話の展開を予測しつづ、それに対する質問や反論などを考えることができる	14 ()
	内容理解	教科書レベルの英文を聞いておおまかに(80%程度)理解できる	15 ()
	活用教材	CNN Student News などを見たり聞いたりしておおまかに(80%程度)理解できる	16 ()
	コミュニケーション活動	Pair work, Speech, Presentation, Discussion, Debateなどの活動において、クラスメートの発言をほぼ理解できる	17 ()
ライティング	エッセイ内容	社会性の高い事柄や時事的な事柄について500語程度で書くことができる	18 ()
	エッセイ形式	AREPAの法則に沿って書くことができる	19 ()
	要約・意見文	BBC、ABC Newsなどを読んで英語で要約や自分の意見を書くことができる	20 ()
	コミュニケーション活動	Speaking/Writingの活動につながるようなメモを取ることができる	21 ()
	再生活動	STEP 1 新しく学んだ単語やフレーズを使って書くことができる STEP 2 新しく学んだ内容や知識、文章構成を利用して書くことができる	22 () 23 ()
クリティカル・シンキング	4技能	複数の視点から問題やその解決策を考えてそれを表現することができる	24 ()
	リーディング	ある事柄の理由(メリット、デメリットなど)に必要な説明と具体例を付けて5つ以上考えることができる	25 ()

教室からの声

年間を通してディベートや各種コンテスト、海外研修などの機会がある同校では、「中学時代に比べて英語ができるようになった」、「英語を使うのが楽しくなった」という生徒が少なくない。また、II学科では、「時事英語」などにおいて、国際紛争やエネルギー・食糧危機など、世界の様々な問題に触れることで国際貢献の意識が高まり、諸問題の解決のために自分に何ができるかという視点から将来の進路を考える生徒も増えている。

◎授業以外の取組

1. 1年次には「英語セミナー」に参加、2年次には有志が全国ディベート大会に出場

II学科では、毎年1年次の2月の土曜日に県内のALT十数人を招き、1年生を対象とした「英語セミナー」を実施している。セミナーでは自己紹介ゲームやスキットなどを行い、生徒は英語漬けの1日

を体験する。メインはディベート大会である。生徒は、この日のために2学期後半から2対2でのディベートを練習している。当日はALTがジャッジとなって、英語力や論理性を競う。

2年次では、毎年、有志の生徒がチームを組み、「全国高校生英語ディベート大会」に出場している。1学期に出場者を募り、出場チームが決まった後は週に数回集まり、教員から指導を受ける。例年、県の予選を勝ち抜き、本大会への出場を果たしている。

2. 海外の姉妹校との活発な交流を通してコミュニケーションの楽しさを知る

海外の姉妹校との交流事業も盛んに行われている。毎年、夏季休業中に、2年生を中心として（一部は1年生）、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドの姉妹校への短期留学を実施している。I学科・II学科合わせて十数人の生徒が参加するが、例年希望者が多く、面接などによって選抜する。

姉妹校からの受入れも、年に2回程度実施している。学科を問わず、生徒は留学生と一緒に授業を受けたり、ホスト役になった生徒は留学生と観光やレクリエーションを楽しんだりしている。

またII学科では、2年次の10月に、シンガポールで語学研修を行う。シンガポールでの研修では、英語が母語ではない現地の人々と気軽に交流できるところが、生徒にとって大きな魅力になっている。「多少間違えながらも、現地の人々と英語でコミュニケーションできた」という成功体験が、英語を使う喜びを生徒に感じさせている。

海外の生徒との交流は、普段の教室の授業では得られない多くの気づきや成長を生徒にもたらしている。アラスカで1年間の長期留学を体験した生徒は、家族同様に助け合い、時には本音をぶつけ合いながら絆（きずな）を深めていった体験を振り返り、「一人で考えて行動する力が以前よりも身に付いた」と述べている。また、ニュージーランドの留学生のホスト役を務めた生徒は、初めての留学生との交流を前に不安になっていたが、言葉を交わすうちに自分たちに共通の趣味があることがわかり、純粹に会話を楽しむことができたという体験記に綴っている。

取組紹介⑥ F 高等学校

思考力・表現力を伸ばす指導で コミュニケーション・ツールとしての英語力を鍛える

◎学校プロフィール（※学級数及び生徒数は平成 27 年 2 月調査日時点）

設立・形態	明治 41（1908）年設立 全日制／3 学科（本報告書では「Ⅰ学科」「Ⅱ学科」「Ⅲ学科」と呼ぶ）／共学
学級数・生徒数	Ⅰ学科／第 1 学年…2 学級（80 人） 第 2 学年…2 学級（82 人） 第 3 学年…2 学級（83 人） Ⅱ学科・Ⅲ学科／第 1 学年…4 学級（168 人） 第 2 学年…4 学級（167 人） 第 3 学年…4 学級（168 人）
ALT 活用状況	ALT は常勤が 1 人。1 年次は週 1 回（クラスを半分に分け、それぞれに ALT が入る）。2 年次は必要に応じて入り、不定期。3 年次はライティングの授業で、授業の 4 回に 1 回の割合で入る
取組の特長	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル人材育成などの取組…スーパーサイエンスハイスクール、スーパーグローバルハイスクールの指定 ・音読の多用…アウトプットの基礎として音読を重視し、「使える英語」の習得につなげる ・思考力・表現力の育成…正解のない問いへの答えを英語で表現し、共有する ・1 年次必修の海外研修…生徒自身が行き先を決め、活動の内容をコーディネート

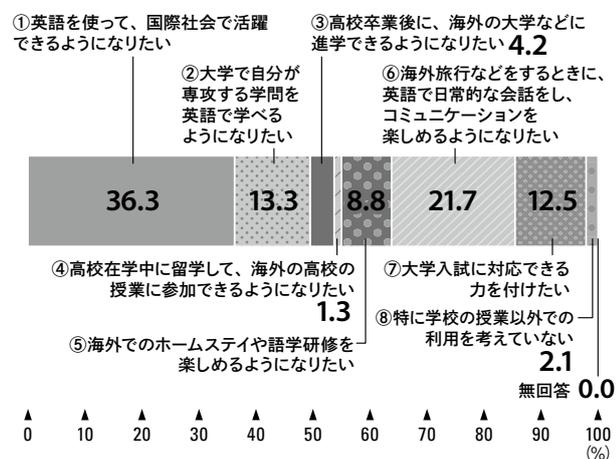
◎試験結果、質問紙における学校の特徴

・第 3 学年の平均スコア（点）

	Reading	Listening	Writing	Speaking
F 高等学校	201.6	203.4	81.1	10.9
全国平均（公立学校）	126.7 / 320	117.1 / 320	24.9 / 144	4.2 / 14

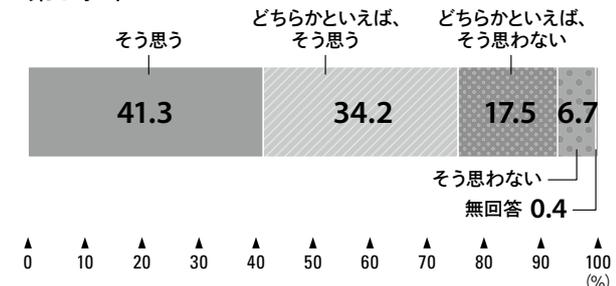
・生徒質問紙結果

No.2 どの程度まで英語を身に付けたいと思っていますか。最も当てはまるものを一つ選んでください。



No.12 以下の学年の英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか。

・第 3 学年



スコアは 4 技能とも全国平均を大きく上回り、英語学習への目的意識も高い

4 技能のスコアが全国平均を大きく上回っている。意識面でも、生徒質問紙 No. 1「英語の学習は好きか」について「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」の回答率は 73.3% に上る。No. 2「英語を身に付けたい程度」についても「①国際社会で活躍できるようになりたい」、「②大学で自分が専攻する学問を英語で学べるようになりたい」との回答が約半数を占め、英語学習に対する目的意識が高い。また、No. 12「聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか」に「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」と回答した第 3 学年の割合は 75.5% と非常に高く、英語を用いて思考力・判断力・表現力や課題解決力などの育成に力を入れている様子が見られる。英語担当教員の英語力も高く、教員質問紙 No. 7「英検準 1 級、TOEFL iBT 80 点、TOEIC 730 点のいずれかを取得しているか」では、大半の教員が「取得している」と回答している。

◎調査結果に寄与したと考えられる授業内の取組

1. アウトプットの基礎となる音読を重視

F高等学校では、例年170人前後が国公立大学に合格する。平成14年度にスーパーサイエンスハイスクール（SSH）、平成26年度にスーパーグローバルハイスクール（SGH）の研究指定を受けており、理数教育やグローバル人材の育成における先進校でもある。

同校には、将来、英語を使って国際社会で活躍したいという希望を持って入学してくる生徒も多い。すべての英語担当教員が「使える英語の習得を目指す」という方針を共有して授業に臨み、入学直後のオリエンテーションから生徒に繰り返し伝えている。そうした教員の姿勢が、大学入試で終わらない英語学習に対する意識の醸成につながっている。

授業で大切にしている活動の一つに音読がある。同校では、教科書の英文をモデルとして様々な表現を蓄えることが、コミュニケーション能力を高めるための重要な基礎練習の一つになると考えている。音読を行う際は様々な工夫を凝らし、生徒の知的好奇心を喚起するように意識している。

[音読の活動例] “Bumpy Reading”

- ① 教科書本文のCDを聞いてリピートする。
- ② 本文の一部を空所にしたり頭文字のみを示したりしたワークシート（160ページ図1の3）を使い、ペア・ワークを行う。その際、一方の生徒は空所に入る語を考えながら本文を読み、もう一方の生徒は教科書を見ながら必要に応じてヒントを出し、パートナーが最後まで読み切れるように支援する。

同校が音読を重視するのは、スピーキング力を鍛えるだけでなく、教科書本文を何度も聞いたり読んだりすることを通して、リスニングやリーディングを含む複合的な技能の向上が見込めると考えているためである。音読は学年を問わずに行い、学年が上がっても、生徒は緊張感を持って熱心に取り組んでいる。生徒は、音読を通して語や表現などが頭に蓄積されていく手応えを感じているようである。

2. 思考力や表現力を伸ばす課題の設定

同校では、次の例のように教科書の内容理解にも工夫を凝らしている。

[内容理解の活動例] 単元の話題：地雷除去

- ① 教科書を見ずに音声を聞き、世界の地雷数や地雷除去プロジェクトの成否など、大まかな内容が聞き取れているかどうかを3択問題（図1の2-a～c）で確認する。
- ② 教科書を見ながら、「地雷は見ることも聞くこともできない」という英文がどのような意味で使われているのかなど、内容に深く入り込むことを求める問い（図1の2-d・e）を考える。

また、単に教科書の内容理解を促すだけでなく、英語を用いて思考力や表現力を伸ばす課題を低学年時から意識的にワークシートに盛り込み、生徒の知的好奇心を喚起している。

[思考力や表現力を伸ばす課題例]（図1の2-e参照）

“Large numbers of people must help.”で終わっている教科書本文について、“Add some more words after the sentence below to make it more specific.”という問いを与え、筆者があえて書かなかった部分を生徒に考えさせる。

答えが一つではない問いを考えることで、より深い読みを促すとともに、他の生徒との意見交換を通して、多様なものの見方があることを体感させることをねらいとしている。このような活動は、一度のペア・ワークだけで終わらせるのではなく、前後左右の生徒と別のペアを組んだり3人のグループになったりして、より多くの考えや意見を共有できる機会を設けている。

単元の最後ではreviewとして、教科書本文の要約文を空所補充形式にして提示し、空所に適切な表現を入れていく課題を与えている（161ページ図2）。これは、教科書本文を覚えているかどうかではなく、

Crown No. 24 Lesson 8 "Zero Landmines" Section 1 Name: _____

Today's Goal:

- To be able to understand the problem of landmines all over the world

1. Introduction: Listen to the CD and make notes of the words that you hear.

(Try to write down more than 15 words!)

2. Comprehension A: Answer the questions.

- a) How many landmines are there in the world now?
 ① 12,000,000 ② 120,000,000 ③ 1,200,000,000
- b) How long have mine-clearing operations been carried out for till now?
 ① About 20 years ② About 30 years ③ About 40 years
- c) How successful have mine-clearing operations been?
 ① Very successful ② Successful ③ Not so successful
- d) What does "mines cannot see or hear" (p.117, L.11) mean?
 ① Mines cannot be found easily. ② Mines cannot make any sound.
 ③ Mines cannot understand what is touching them.
- e) Add some more words after the sentence below (p.118, L.3) to make it more specific. Choose either "with" or "to" to start your writing.
 Large numbers of people must help [with / to] _____

3. Bumpy Reading

Part A

Landmines! There may be (a.n.a/ ~も) 120 million of these terrible (w/) in over 70 countries throughout the world. Most of these (m/) are under the ground and will (e/) when they are stepped on. But mines cannot (s/) or hear. They cannot (t/) a soldier (f) a child, a grandmother, a cow, or an elephant. When anything (t/) them, they will explode. They (r.a/ 作動しつづける) for a very long time, 50 years, maybe even a (c/).

The (m/) to remove landmines is said (t.h.s/ 始まった) in the 1990s. (M.c/) operations have begun, but (a.s/ 十分な) government or agency can (p/) clear that many mines. Large (m/) of people must help.

Part B

Landmines! There may be as many as 120 million of these (t/) weapons in over 70 countries (t/) the world. Most of these mines are (u/) the ground and will explode when they (a.s.o/ 踏まれる). But mines cannot see or (h/). They cannot tell a (s/) from a child, a grandmother, a cow, or an elephant. When (a/) touches them, they will (e/). They remain active (f.a.v.t/ とても長い間), 50 years, maybe even a century.

The movement to (r/) landmines is said to have started (3番: 1990年代に). Mine-clearing (o/) have begun, but no single government or (a/) can possibly clear (t/ それほど) many mines. Large numbers of people must (h/).

4. Mind Map: Create your own mind map to summarize this section.

5. Opinion Writing: What can you do to help solve the problem of landmines? Write your opinion with reason.

In my opinion, to help solve this problem, _____

6. Comprehension B

- a) True or False: Listen to the sentences and decide whether they are true or false.
 1. (T / F) 2. (T / F) 3. (T / F)
- b) Vocabulary Check: Fill in the blanks with words that appear in this section.
 1. Since the bomb (e/) with a loud noise, we were surprised.
 2. There are many (a/) volcanoes in Japan, including Mt. Aso.
 3. My leg was (t/) in the accident.
 4. We couldn't find a (s/) parking spot available near the stadium.

<Answers / True or false sentences>

2. a) ② b) ① c) ③ d) ③
- e) with mine-clearing operations / to remove(clear) landmines
6. a 1. Landmines lie in a very limited area in the world. (F)
 2. Some mines might explode even 100 years after they were made. (T)
 3. Even though mine-clearing operations are being carried out, there are still many mines in the ground. (T)
- b 1. Since the bomb (e/ exploded) with a loud noise, we were surprised.
 2. There are many (a/ active) volcanoes in Japan, including Mt. Aso.
 3. I had my leg (t/ injured) in the accident.
 4. We couldn't find a (s/ single) parking spot available near the stadium.

図1 地雷除去が話題の単元で使用したワークシート

図2 知識の定着を確認するためのワークシート

Crown No. 27 Lesson 8 "Zero Landmines" Review Name: _____

● Fill in the blanks below and complete the summary for this whole lesson.

Landmines are (1.t/) weapons found in over 70 countries. They are (2.b/) in the ground and will (3.e/) when something touches them. They cannot (4.t/) the difference between a (5.s/) and ordinary people. They (6.h/), or even (7.k/) people without thinking. There are as (8.m/) as 120 million landmines and they will (9.r/) active for a long time. In the 1990's, some people started a (10.m/) to remove them, but there are too many for one (11.g/) or organization to (12.c/) all of them. Large (13.n/) of people must help.

Sakamoto Ryuichi is one of those who help (14.r/) landmines. He made a (15.s/) called "Zero Landmine." He saw a TV program about Chris Moon, a man who had (16.l/) both his arm and leg when clearing landmines in Africa. After such an accident, Chris should have (17.g/) up, but he did not. He got an (18.a/) arm and leg and began running in marathons. He even became a (19.t/) for the 1998 Nagano Winter Olympics. Chris explains how (20.e/) landmines are and how long they can lie (21.a/). Some of those who step on a landmine die slow (22.d/). Others have a terrible life of (23.m/), (24.p/) and (25.d/).

Sakamoto Ryuichi visited the (26.v/) place where Chris had lost his arm and leg in Mozambique. Chris taught Sakamoto that landmines "don't know (27.p/)" and how much they can (28.d/) people's lives. Later he looked at the (29.m/) of the countries where landmines are, for example, Korea, Cambodia, Bosnia, Angola and Mozambique. He became (30.i/) in the music of those countries and did some research. He tried to (31.p/) it all together in "Zero Landmine". Many of those who (32.p/) in the project believed that by removing landmines, they could start changing the (33.o/) idea that problems can be solved by (34.v/).

The money from the CD is used for the (35.c/) to remove landmines and (36.r/) minefields to rice (37.p/) or (38.c/) land. Each landmine removed from the ground may (39.s/) one leg or one life. Even after peace is (40.d/), the landmines are still there without (41.r/) peace. If we remove landmines, the children of the world can live safely. They need our help.

● Choose one appropriate word for each blank in the sentences. You might need to change some words into an appropriate form.

a) A bomb () in a station, but amazingly there were no victims.
 b) She was badly () in the accident.
 c) I have two kids: one is () and the other is calm.
 d) He is good at making () flowers which look like real ones.
 e) You don't have to be () with only one bad result.
 f) Black is sometimes associated with ().
 g) Whenever Andy remembers the () of his childhood, he feels sad.
 h) Though my family was (), we were happy together.
 i) We have to fight against unjust () against foreign people.
 j) My suitcase was () during the trip, so I had to buy a new one.
 k) The environment is an () to young people.
 l) The film contains () scenes so children under the age of 15 are prohibited from watching it.
 m) The () to educate teenagers about the dangers of smoking was a big success.
 n) The world is () all the time.
 o) Since I met him after a long time, I couldn't () him at first.
 p) Several () ago, nobody expected the world to be like it is now.
 q) This box contains a () eggs.
 r) The whole class () in the play.

Word List

1. active
2. artificial
3. campaign
4. damage
5. decade
6. dozen
7. discriminate
8. discourage
9. evil
10. explosion
11. expansion
12. injury
13. issue
14. miserable
15. participate
16. poverty
17. recognize
18. violence

文章が変わっても内容が的確に理解できているかどうかを確認するためのものである。また、単元で学習した単語については、辞書の例文などを活用し、教科書本文とは異なる文脈の中で適切に使えるかどうかを確認し、知識の確実な定着を促している。

これらの活動以外にも、課題文を読んでエッセイを書く(図3)など、自分の考えや意見などをアウトプットする機会を多く設けている。

3. 「間違ってもいい」「間違うことが当然」と思える教室の雰囲気づくり

同校では、自分の英語力に自信が持てず、英語を使うことに抵抗を感じる生徒も少なくないため、生徒の知的好奇心の喚起とともに、生徒自身が間違ってもいい、むしろ外国語学習において間違えることは当然であると思える教室の雰囲気づくりを意識している。

基本的に、スピーキングやライティングにおいて、一字一句を訂正することに重点を置いてはいない。生徒の誤りを指摘する場合であっても、間違っただけを印象付けるのではなく、「このポイントに気付けたのはよかった。こうすると更によくなる」というように、生徒の発話や書いた英文を生かしつつ、さりげなくより適切な方向へ誘導していくようにしている。また、生徒の間でよく見られる誤りをクラス全体で共有し、全員のレベルアップの機会として活用する場合もある。生徒は周りから吸収して学ぶ力が非常に強く、誤りを放置するとそのまま吸収してしまう恐れがあるため、生徒が委縮しないように配慮しながら正しい理解へと導くように心がけている。

図3 エッセイ・ライティングのワークシート

ESSAY-WRITING - 2014 - OPINION	
Aim	<ul style="list-style-type: none"> In today's class, you will practice writing your opinion about an article you have read. To write a good opinion about this article, you will need to remember the things you have learned in previous classes. These include: <ul style="list-style-type: none"> Discourse markers Brainstorming (and PESCR) Opinion, Reason & Support Conclusion techniques Summarising (or fitting your writing in a word count)
Opinion	<ul style="list-style-type: none"> The purpose of an essay containing an opinion is to explain how you feel. It's your personal viewpoint, so it's different from an objective essay.
Article	
Topic: 'We should have the death penalty as a punishment for criminals.'	
Introduction	In terms of punishing criminals, both good and bad things come from using the death penalty.
Good	
First, the death penalty is a good way to make people afraid of committing crimes in the first place. For many people, the idea of the death penalty is so frightening that they don't even try to carry out a crime. In this way, very few people will actually be killed using the death penalty, but many crimes will be prevented. In addition, many people think that for certain crimes such as murder, the only way to get justice is for the same thing to be done to the criminal.	
Bad	
On the other hand, many people commit crimes because of difficult life situations. So, in many cases, criminals are able to reform themselves if they are given a chance. If a criminal is given the death penalty as punishment, they will never get the opportunity to reform themselves. This is bad for society. Moreover, some people say that nobody should be able to kill other humans. If we kill a criminal because of a crime they committed, then we are as bad as they are. Having the death penalty is not honorable.	
Conclusion	In summary, the death penalty is good because it may make people afraid to commit crimes and it is a fair punishment for crimes like murder. But overall, if people are given a chance to make up for what they did, it is better for society. Killing criminals as punishment makes others sink to the level of criminals.
<i>First, to get an opinion, brainstorm! Try using PESCR.</i>	
Brainstorm	

教室からの声

「英語Ⅱ」の授業アンケートからは、「授業を聞いているだけで単語を覚えられた」、「思ったことをすぐに話すことが、昨年より多くできるようになった」など、活動主体の授業を通して、基本的な言語知識とともにそれを活用する力が向上していることを実感している様子が見える。また、「ペア・ワークを通して友達の知識や考えを知り、自分の思考を深めることができた」というように、他の生徒との交流を通して視野を広げた生徒も少なくない。

◎授業以外の取組

1. 生徒たちが自ラ行き先を決める海外研修

同校では、校外で実際に英語を活用する場面も大切にしている。その一つとして、生徒全員を対象に

1年次3月に海外研修を実施している。本研修では、生徒自身が行き先を決める。1年次4月に各クラスで海外研修委員を選出し、以降は委員が中心となって研修のテーマを決めるとともに、学年全体でアンケートをとるなどして、夏までに4コースを選定する（平成26年度はアメリカやマレーシアなど）。生徒は各自が考える研修目的に沿って1コースを選び、コースごとに複数の班に分かれて研修内容（ホームステイ、学校や企業訪問、インタビューなど）を計画し、現地の情報（ホームステイ時のマナー、飲料水事情など）を調べて共有する。

また、学校以外が主催する海外研修にも積極的に参加している。平成25年度から行われている教育委員会主催のグローバルリーダー育成研修では、同校からの応募者が最も多い。同校の生徒は派遣団の中でリーダーシップを発揮するだけでなく、現地の語学研修でも他国の高校生に負けずに活発に発言している。帰国後は、研修の様子を壁新聞にして他の生徒と共有したり、授業を中心とした学校活動全体においてもこれまで以上にリーダーシップを発揮したりするようになっている。

一方で、海外の高校生との交流を通して、自分たちに知識がないことに気付かされ、「深く考えるための知識と正確に伝えるための語学力を身に付けたい」と語った生徒もいる。こうした気付きが、更なる学びへの意欲へつながっていくものと思われる。

2. 教材の共有や各種研修などで、教員が互いに高め合う

同校では、一定の方針を共有しながらも、教員それぞれの持ち味を生かすため、ワークシートなどは個々の教員が創意工夫して作成している。ただし、指導方法などについては絶えず情報交換を行っている。例えば、各自が作成したワークシートやデータを提供したり、教材を使った際の生徒の反応を伝えて教材の改善策について意見交換をしたりしている。ある程度教員の個性を認めながらも、指導内容・方法などについて不断にノウハウの共有や目線合わせを行い、教員同士が互いに高め合う姿勢が根付いている。

また、英検やTOEICなどの資格・検定試験に挑戦する教員も多い。各試験団体から提供されている英語教員を対象とした特別受験制度の利用に加え、教育委員会の支援により、教員の受験料負担はない。教育委員会の助成は平成26年度に始まったが、同校の英語担当教員の受験者は1年間に延べ14人と最も多い。教育委員会としては、教員が資格・検定試験を受験することによって個人の英語力を高めるだけでなく、試験の形態や内容を知ること、授業での指導やテストの作問などにおいて生徒に還元されることも多いと考えている。

さらに、校外研修や他校視察の機会も多い。教育委員会主催の研修会では、各校の教員が指導や評価における成果を共有したり、外部講師を招いて研修会を実施したりする。先進校視察も活発に行っており、他校の取組を持ち帰って授業に取り入れ、その授業を参観し合うことも多い。多忙な校務の合間に研修に参加するのは大変だが、校内の取組だけでは気付くことができない視点やアイデアを学校外からは得ることができると同校では考えている。

今後の課題は、英語を使って何ができる生徒を育成していくのかという教養の広がりや深みを追求していくことである。英語はあくまでもコミュニケーション・ツールであり、伝えるべき中身の土台となる知識や教養、それを的確に表現し筋道立てて伝えるための論理的思考力の育成にこれまで以上に力を入れていくことで、グローバル社会で求められる英語力を伸ばしていきたいと考えている。

終章

1. 本調査の意義

(1) 英語の資格・検定試験団体との連携による、4技能テストを開発・活用した大規模調査によって生徒の英語力を把握

これまでは、教育委員会を通じて実施した各学校に対するアンケート調査により、生徒の実用英語技能検定（英検）などの資格・検定試験の結果を参考に、生徒の英語力の把握を行ってきた。しかし、本調査では、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月閣議決定）において、グローバル人材育成に向けた取組として、外部試験を活用した生徒の英語力の把握・検証などによる戦略的な英語教育改善の取組の支援を行うことが掲げられたことを受け、全国の高等学校3年生約7万人（約480校）を無作為抽出し（「話すこと」については1校あたり1クラス40人程度を対象）、生徒の英語力（聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能）と英語の学習状況を調査・分析し、これまでの英語教育の成果と課題を検証した。

本調査では、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages：ヨーロッパ言語共通参照枠）という国際的な指標を参照して測定・分析を行った。その結果、日本の高等学校3年生の英語力は4技能すべてにおいて課題があり、特に「話すこと」及び「書くこと」の発信技能については問題がより深刻であることが明らかになった。

また、生徒及び英語担当教員を対象に実施した質問紙調査の結果を分析することで、学校における指導上の課題がより明確になった。特に、指導や評価の具体的な方法に関する状況を改善する必要があることが明らかになった。

学校においては、今回の調査結果を授業指導の充実や生徒の学習状況の改善に役立てることが期待されるとともに、国としては、次期学習指導要領の改訂に向けた検討材料として役立てることができるであろう。

(2) 英語4技能テスト実施の実行可能性を検証

本調査では、文部科学省が学習指導要領に基づき、生徒の英語の4技能の力を総合的に測るテストの仕様を作成し、民間の資格・検定試験団体（今回は株式会社ベネッセコーポレーションへ委託、ベネッセ教育総合研究所が協力）とともにテスト及び質問紙調査を作成・実施するという「フィージビリティ調査」の側面もあった。筆記テストの試験監督及びスピーキングテストの試験官は調査対象校の英語担当教員などが務め、試験官の事前の研修を含めたテストの運用について実験的な要素を持たせた。

なお、平成 26 年度に実施した本調査では、旧学習指導要領で学んだ高等学校 3 年生の英語力を測定している。平成 27 年度には新学習指導要領にのっとった指導を受けた生徒の調査を行い、経年比較を行う予定である。このような取組を通じて、高等学校の英語教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立していくことが可能となるであろう。

平成 26 年 12 月、中央教育審議会答申¹において提言がなされた高大接続の実現に向けた新しい「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」及び「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の在り方について、現在、専門家会議において審議がなされている。特に、英語については資格・検定試験の活用を含めた 4 技能テストの開発及び導入が検討されているが、本調査の実施はその可能性を検証する上で意義深い。

2. 改善への取組のポイント

(1) 指導上の主な問題点と改善への指針

本編でも言及しているが、ここで改めて、本調査によって明らかになった指導上の問題点及び改善策を整理しておく。

【リーディング】

目的に応じて読む指導が十分ではなく、生徒はどのような英文を読む場合も「すべての内容を正しく理解する」ことを目的として学習してきた傾向が強いようである。教員が訳読方式の指導から脱却できていない可能性がある。実際の場面では、何らかの目的があるから読み、その目的によって読み方が変わる。同一の文章であっても、目的によっては読む箇所が変わることもありえる。まとまりのある英文を素早く読んで概要をつかむといった、実際の英語使用において頻繁に行われる読み方をすることが望まれる。

また、リーディングの指導に使用する教材を「読む目的の多様性」という視点で見直した上で、様々な読み方の指導を行うべきである。そのため、現在使用している教科書の英文が生徒にとって難しすぎないか、短すぎないか、英文の種類・内容に多様性があるかなどについて検討を行う必要がある。特に、読みながら考える習慣を促進するためにも、論証文を十分に読み、書き手は一番何を伝えたいのか、その主張に対して読み手としてどういう立場をとるのかということを確認した上で、口頭で議論したり書いたりするような活動を行うことが求められる。

¹ 中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学希望者選抜の一体的改革について」（答申）平成 26 年 12 月 22 日

【リスニング】

英語を聞いて英語のまま理解することができていない生徒が多い。この点は、聞き取る英文に出てくる表現とは別の表現が設問で使われている際に、生徒が両者を関連付けるのに苦労していることから明白である。したがって、新学習指導要領で明示しているように英語の授業は英語で行うことを基本とし、教員が教科書中の英語や生徒の発話内容を他の表現で言い換えることなどを積極的に行うことが望まれる。

また、話の要点や全体の流れ（誰が、どの立場で、どのような意図で、何を話したか）を論理的にとらえる力が不足しているため、断片的な理解にとどまっている。文や文章における意味解釈の力を育むためには、単語の文字や音声レベルでの情報処理のために記憶力を費やさないことが重要である。実際のコミュニケーションにおいて使用される定型表現などを繰り返し使用しながら、キーワードや要点を聞き取り、話の流れを書き留めるといった活動を行うことが求められる。

【ライティング】

そもそも英文を書く経験が不足している生徒が多い。まずは平易な英文を読み、その概要・要点や内容に対する感想や意見などを、既知の表現や英文の中で学習した表現を使って一文レベルでも書く活動を日常的に行う必要がある。その際、理解できた内容の中で重要な箇所をノートに書いたり、それらをパラフレーズしたり、コメントを書いたりするといった学習によって、聞いたり読んだりする活動を通して思考し、判断した上で、書く力を育むことが大切である。

また、与えられた話題について論点や根拠を明確にして書かせる指導が不十分であることから、例えば、“Winter is better than summer.”といった平易な話題について、30～60語程度の短い文章でもかまわないので、立場を明確にし、主張と根拠を区別して、例を挙げて書く活動を増やすことが大切である。考えが浮かばないという生徒も多いので、英語を書く前段階の活動として、理由や具体例を出し合うブレインストーミングのような活動をペアやグループで行うとよい。さらに、より長い英文を書けるようになるために、文章の構成方法を教え、アウトラインを作成した上で書かせるといった指導も求められる。

【スピーキング】

スピーキングに関しては、英語で話し合ったり意見を交換したりする活動を経験していない生徒の割合が高いため、ペア・ワークやグループ・ワークといった主体的・協同的な学習活動の形態をこれまで以上に取り入れることが求められる。その際、スピーキ

ングを独立した技能として扱うのではなく、聞いたり読んだりした内容をまとめ、それに対する考えを書き、それらをもとに発表したり対話したりする学習を経験させることが重要である。

また、授業において英語でのディベートやディスカッションを行ったことがあると回答した生徒ほど、本調査において、より適切かつ多様な表現を使った応答ができています。生徒が興味・関心を持つことができる身近な話題について主体的にスピーチ、ディベート、ディスカッションなどの活動を行うなど、生徒に豊富に発話させる指導が求められる。

以上、本調査で明らかになった各技能に係る課題とその改善策の例について述べた。「聞く」「読む」という受信技能にも問題はありますが、特に、「話す」「書く」の発信技能が弱い。ただし、二つ以上の技能を統合的に使うことに慣れていない生徒が多いので、学習指導要領で明示しているように、それぞれの技能を個別に指導するのではなく、複数の技能を統合して使う活動を通して4技能を総合的に育成する必要があります。そのためには、聞いたり読んだりしたことを理解することにとどまらず、聞いたり読んだりしたことについて、生徒が主体的に考えを話したり書いたりして人に伝えることを最終的な目的とした指導が行われることが望ましい。

日々の授業において、生徒が英語の基礎的・基本的な知識・技能を活用し、幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う言語活動を豊富に経験することで、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりし、互いに学び合う意識を高め、コミュニケーション能力を向上させていく必要がある。そのため、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの言語活動を通して自ら課題を発見し、生徒が主体性を持って他者と協働し、思考力・判断力・表現力等を身に付ける学習指導方法（アクティブ・ラーニング）を充実させることが求められる。

（2）総合的なコミュニケーション能力の育成に資する目標の設定など

高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるような総合的なコミュニケーション能力を身に付けることが重要であるが、本調査では、4技能に係る生徒の英語力の弱点及び指導上の問題点が明確になった。また、生徒の英語学習に対する意識面では、英語が好きではないとの回答が半数以上であった。

一方、テストのスコアが高い生徒ほど将来の英語使用のイメージが具体的であった。次期学習指導要領では、将来の英語使用のイメージを持ちながら学習意欲の維持・向上を図るため、身に付けた知識・技能を主体的に活用して、「英語を使って何ができるよ

うになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式）を設定することが強く望まれる。

あわせて、生徒の英語力を把握し、きめ細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、従来設定されている英語力の目標（学習指導要領に沿って設定される目標〈中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度から2級程度以上）を達成した中高生の割合50%）だけでなく、高等学校段階の生徒の特性・進路などに応じた英語力の目標、例えば、高等学校卒業段階で、CEFR B2 レベル（英検準1級、GTEC CBT 1250～1399点、TOEFL iBT 72～94点、TEAP 334～399点など²）を設定し、生徒の英語力の把握、課題の分析、指導の改善を行うことが必要である。

（3）学校における指導・評価の改善

与えられた課題について、自分の意見や立場を話したり書いたりしている生徒が少ない。聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語を用いて話し合ったり意見を交換したりしていると思う生徒の割合はテスト結果がよいほど高いことなどから、「話すこと」や「書くこと」などを通じて主体的に互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を更に展開することが重要である。

各校では、学習指導要領を踏まえながら、4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標をCAN-DO形式で設定し、技能の統合を意識した言語活動に関する指導・評価の方法を改善することが必要である。

あわせて、生徒の4技能の英語力とともに、学習状況の調査・分析を行い、その結果を教員の指導改善や生徒の英語力の向上に生かすことが重要である。特に、英語の学習が好きではないという回答が半数を上回ることから、主体的な学びにつながる「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を重視した評価を行うことによって、生徒自らが主体的に学ぶ意欲や態度などを含めた多面的な評価方法を検証し、活用していくことが重要である。

そのためにも、本調査を次年度以降引き続き実施して経年比較を行うこと、教員の指導力向上に資する教材や指導事例集などを作成して活用すること、平成26年度から文部科学省が行っている「英語教育強化地域拠点事業」や「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」などを継続していくことが求められる。

² これらのスコアは、各資格・検定試験団体がCEFRとの関係を独自に分析・公表しているものである。

(4) 入学者選抜などの改善

大学入学者選抜における英語力の測定は、高等学校での学習を踏まえ、4技能のコミュニケーション能力が適切に評価されることが必要である。そのため、各大学では、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーなどとの整合性を図ることを前提に、入学者選抜に4技能を測定する資格・検定試験の更なる活用を促進することが強く望まれる。特に「スーパーグローバル大学創成事業」で採択された大学は、大学入試センター試験の改編を待たずに、個別選抜での4技能を測定する資格・検定試験の活用を、スピード感を持って検討すべきである。

また、高等学校における英語力評価や入学者選抜においても、4技能がバランスよく測定できる試験、さらには、2技能以上を統合して使う力を測定できる試験の開発もしくは活用の検討が急務である。

ただし、今後、日常的な評価の他に、資格・検定試験を英語学習の一つの評価手段として活用する場合、試験対策そのものが英語学習の目的とならないように留意し、コミュニケーション能力の向上につながる授業展開が求められる。

(5) 教科書・教材の改善

これまで述べたような指導改善を行うに当たっては、発表・討論・交渉といった言語活動を展開し、総合的なコミュニケーション能力を育成する必要がある。そのため、今後の教科書・教材については、これらの言語活動を効果的に行うことができるように英文のレベル、内容、長さなどについて十分な配慮が求められる。あわせて、コミュニケーション能力を効率的かつ効果的に育成するために、音声や映像を含めたICTを活用した教材の開発と効果的な使用法の検討を促進すべきである。

(6) 英語担当教員の養成・採用・研修の改善

本調査から見えてきた様々な課題に対し、英語担当教員の英語力及び指導力の向上も喫緊の課題であると言える。英語担当教員が4技能を通じて高いコミュニケーション能力と指導力を修得できるよう、教職課程の在り方、採用、現職の英語担当教員に対する研修を一体的に見直す必要がある。

教職課程においては、生徒の英語による言語活動が中心となる授業を展開する力を身に付けることが求められる。そこで、4技能を総合的に育成するための指導法、発表・討論・交渉などの言語活動の充実に対応した指導計画の作成、ペア・ワークやグループ・ワークの展開方法、時事的な話題や社会課題などについて意見交換などを行う模擬授業、4技能の能力を適切に測ることができる評価方法（筆記テストに加え、特に「話すこと」

や「書くこと」の能力を測るためのパフォーマンステストなど)の在り方、教材の効果的な活用などに関する内容の改善が必要である。

採用時においては、資格・検定試験による一定の英語力を求めるとともに、模擬授業などによる実践的な指導力を評価するなど、採用方法の改善を図ることが求められる。

また、本調査において、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語を用いて話し合ったりする授業をあまり行っていない教員が多いことが明らかになった。そのため、現職教員の研修においても、前述の教職課程で扱うべき内容と同様の事項について研修の機会を充実させることが求められる。

さらに、こうした取組を通じて、養成段階における英語教員志望者及び現職の英語担当教員の英語力を、少なくとも英検準1級、TOEFL iBT 80点程度以上までに高めていくことなどが期待される。